ISSN 2424-0265
南山大学ライネルス中央図書館カトリック文庫通信
カトリコス No.38 2023.11
NANZAN UNIVERSITY
Katholikos

図書館への親しみとあこがれ

松根　伸治

改修工事を終えて名称もあらたまったライネルス中央図書館には日々お世話になっている。メインストリートと建物のあいだの見晴らしがすっきりし、出入口付近の構造も広々として気持ちいい。人の集まるセミナーや行事に対応したり、ちょっとくつろげる場所を整備したりするのも現代の大学図書館の役目だろうが、このことは、大量の書物を整理し保管しておく本来の目的と原理的に矛盾する。容れ物は有限だからである。

図書館が開放的で明るくなったことを喜びながらも、旧式人間としては、隙間なく本の詰まった書架が稠密に立ちならぶ風景への愛着も捨てがたい。地下1階の製本雑誌や地下2階の研究用図書類のあたりは今も薄暗い森の中を散策する気分があって、こんな本があったのかと手に取ったり、棚の背表紙をぼんやり眺めて連想を重ねたりしていると、時間と方角の感覚が鈍っていく心地よさがある。子供のころから本の多い場所は好きだったが、高校のとき映画『薔薇の名前』を見て修道院付属の図書館や写字室のあやしげな光景に魅了され、大学生になって学部書庫の迷宮的雰囲気に感激して以来、図書館というところは私には便利な施設以上の特別な空間であり続けているようだ。最近は目当ての文献を検索して借り出す単調な手続きが多く、学生時代のように無目的に図書館をうろつきまわる愉楽は減ったものの、ときどき思わぬ収穫がある。ネットや電子データはその場で必要な情報をえるには素早く有益だが、本との偶然の出会いや予想外の連鎖みたいなものが長い目で見ると研究にはおそらく大事で、図書館での経験からそのことをたびたび学んだ。

勉強や研究が進むと必要な文献は次々に増えていくが、驚くべきことに（むしろ当然だろうか）、自分が読みたい本や読むべき本が図書館にはあらかじめ大量に所蔵されている。購入して手元におくほどでもないが、関連する周辺分野や調べもので必須の本も多い。図書館所蔵の760,921冊（2023年3月31日現在、雑誌と視聴覚資料をのぞく）のうち、私個人が読むことのできる数はごくわずかだとしても、大学全体では多様な分野の教員と学生が今後も活動するわけだから、各領域でできるだけ多くの良質な書籍をそろえておくことが求められる。自分がいつか読むかもしれない本たちや、読むとは思えないが重要そうな本たちが無数に生息していて、それらが実際に目に見え、手で触れられる意義は現代でも小さくないはずだ。図書館は圧倒的物量により、簡単には手の届かない広大な知的世界への敬意と憧憬をいだかせてくれる。

とはいえ、大学図書館は空威張りの権威的要塞であってはならない。とりわけ初学者や入門者がアクセスしやすく、さまざまなレベルの利便性と楽しさを味わえる場であることが、大学と社会のために必要である。環境や事情の変化はあっても、これからも図書館には私たちが親しみをもてる身近な場所であるとともに、人類の文化と歴史を誇らしく示すあこがれの存在であり続けてもらいたい。そのとき、例の『薔薇の名前』のウィリアム修道士が（そして原作者エーコ自身が）体現するような書物への愛が、図書館を大切にする人たちを結びつけるだろう。

（MATSUNE, Shinji：人文学部教授）

カトリック名古屋教区の恩人・井上秀斎

はじめに

井上　秀斎

「井上秀斎」という名を聞いたことがあるだろうか。『素顔の名古屋教区』(1968)の「先駆者の軌跡」の章に、また「カトリック愛知・岐阜県布教」(布教25(4), 1971.5)にも、カトリック司祭であり本学名誉教授の青山玄神父は「名古屋、岐阜地方にカトリックの教えをひろめた最初の恩人は、井上秀斉氏である。」と記している。

2022年6月、本学の卒業生で青山神父とも親交がある栗木英次氏より、井上秀斎(以下、秀斎)による回想録2種を含む資料一式が南山大学ライネルス中央図書館に寄贈された。栗木氏によれば、これらの資料のほとんどは青山神父より栗木氏に託された資料とのことである。

「カトリック愛知・岐阜県布教」は秀斎の残した多くの回想録をもとに執筆されており、「大正期および昭和前期に井上秀斉氏の書き残した回想録は、多種類におよんでいてそれぞれ部分的に重複しており、筆者は、整理の便宜上それらに(A)から(J)までの符号をつけている。このうち(A)から(I)までの手記は、筆者が岐阜県本巣郡巣南町の大平茂樹氏から譲り受けたものであり、最後の(J)は、神言会東京修道院長フィリップ・アントニー神父が、大正13年2月8日付の井上秀斉氏回想録をローマ字で書き写し、さらにドイツ語に訳したもので、ローマ字文とドイツ語訳は残っているが、元の手記は失われている。」とある。本学に寄贈された2種の回想録はこのうちの(G)(井上秀斎関連資料№1)と(J)(井上秀斎関連資料№3-2)で、それぞれ『岐阜縣天主教傳道日記』『Materialsammlung zu einer Chronik der Apostolischen Präfektur von Nagoya』とタイトルがついている。

大平茂樹氏は秀斎と同郷の本巣郡に生まれた美術教師で、郷土史家の森徳一郎氏による「続・丹羽玄塘が事」(郷土文化9(3), 1954)の中に「然るに之に関して面白い逸話がある。それは此前日岐阜の切支丹研究家大平茂樹氏が、突然私宅を訪問されて曰く『先般丹羽郡扶桑村高木の切支丹遺跡を、南山大学が発堀(ママ)して、尊い殉教者の遺骨を獲たが之に関して某氏がケチをつけ、あれは森徳、田島両人で創作した空中楼閣である。南山大学が夫れを真に受けて発堀(ママ)して喜んでいるのは可笑しい、と謗られるので困ったが、確証ありや。』との質問に…大平氏は大いに喜び、直ちに南山大学へ赴かれた。為めに当日は同大学の切支丹研究専門の大家として全国的に知られた田北耕也氏をも伴って列席された。」と本学の名誉を晴らす逸話が紹介されているのも奇遇である。アントニー神父(ANTONI, Philipp SVD, 1904-1982)については「戦前に名古屋の諸教会で布教に従事したフィリップ・アントニー神父が、ある古い信者(おそらく井上秀斉氏)から聞いたという話によると…」とあるので秀斎とは親しい間柄であったと思われる。残念ながら(G)と(J)以外の8種の回想録の行方は定かではないが、2種の回想録が巡り巡ってカトリック文庫の資料に加わったことは感慨深い。

本稿は、「1.井上秀斎のこと」「2.名古屋教区布教史における井上秀斎関係資料の位置づけ」「3.寄贈資料の紹介」に大きく章を分けている。第一章の「井上秀斎のこと」は、主として青山神父の「カトリック愛知・岐阜県布教[(1)]-(10)」(布教25(4,5,8,9,10,11)-26(2,3,4,5), 1971.5,6,9,10,11,12-1972.3,4,5,6)および本学人文学部教授三好千春氏の『時の階段を下りながら』(2021)を参考にまとめ、そのまま引用した箇所は「」で括っている。また「井上秀斎年表」は紙面の都合上カトリック文庫Webページに掲載する。

なお、「井上秀斎」の「斎」の表記は、引用または参考にした各文献の間でユレがある。本稿では原則として「井上秀斎」と「斎」の字を採用し、引用の場合は原文のママ「斉」などを用いることとした。

1. 井上秀斎のこと

(1) 信仰に目覚めて

秀斎は、1854(嘉永7)年8月20日、岐阜県本巣郡席田(むしろだ)村春近に蘭方医井上齢碩(れいせき)の長男

として誕生した。秀斎が誕生した1854年は、江戸幕府13代将軍徳川家定の時代で、前年に引き続きペリーが7隻の艦隊を率いて江戸湾に再来、3月には日米和親条約が結ばれ、日本が200年以上の歳月を経て開国するというまさに歴史の転換期である。

父、齢碩は内科産婦人科の医師で、余暇には村の青年たちに習字や漢文を教えていた。秀斎も父について医術や、大学、中庸、論語、孟子などを学び、同じ本巣郡の医師野川杳平が、京都から伊藤憲造という英語教師を招いて数屋村に設立した英語学校に入学するが、この学校の学生数はわずか5名で、数か月で揖斐村へ移転してしまう。

1875（明治8）年、21歳になった秀斎はもっと本格的に英語を学ぶため、真幸村の福田省吾氏とともに上京して浜松町の内科産婦人科医師浜田叔甫氏の代診生となり、そこに寄宿して某英語学校に通ったが、その後南部藩出身の真田某と知り合いになり、その紹介で、パリ外国宣教会が経営するラテン学校漢学部の学生になる。パリ外国宣教会は明治初年の日本におけるカトリック宣教の中心となったフランスの修道会である。『時の階段を下りながら』によれば、秀斎が入学したラテン学校は「明治維新後も、浦上キリシタンたちの配流が続いている一八七二年に、体調を崩しペナンから帰国した神学生八人を横浜天主堂（一八六二年一月献堂）に受け入れましたが、さらに入学希望者が続いたため、同年、東京の九段濠端一番町（現・千代田区三番町）にあった旧旗本の屋敷を『ラテン学校』（神学校）としました。」「『ラテン学校』は、神学生たちが属するラテン部と、中国で書かれた漢文教理書を学ぶ漢学部に分かれていました。ラテン部はすべて無料で衣服なども支給されましたが、漢学部も授業料や宿泊・飲食費が無料でした。それは、当時窮乏していた旧幕臣や戊辰戦争で幕府側について官軍と戦った藩（『奥羽越列藩同盟』に参加した藩）出身の士族の子弟たちを惹きつけ、当初ラテン学校に集い、ここで受洗した人々の多くはそういう青年たちでした。彼らの中で最も有名な受洗者は、盛岡藩（『奥羽越列藩同盟』参加藩）出身の原敬でしょう。」とある。ラテン学校は表向きには語学を教えるように見せかけているが、実際には支那語訳のカトリック教理と神学研究のためのラテン語とを教えていたらしい。英語を学ぶという当初の上京の目的は「南部藩の真田某」の影響で神学を学ぶことに方向転換してしまう。いずれにしても秀斎は上京した年の8月に、ラテン学校で教えていたレゼー神父（DROUART DE LÉZEY, Lucien, 1849-1930）からアウグスチヌスの霊名をもらって受洗したのである。上京後1年もたたずに受洗していることに驚かされるが、蘭方医である父の影響などを受けて春近に暮らしている頃からキリスト教に関心があったのだろうか。

（2）伝道士として

秀斎が司祭を目指して教理を学ぶ20代に最も近くにいた神父はヴィグルー神父（VIGROUX, François-Paulin, 1842-1909）であろう。ヴィグルー神父は先のラテン学校で教鞭をとっていたが、ちょうどその頃に来日したオズーフ司教（OZOUF, Pierre-Marie, 1829-1906）から、北緯代牧区の担当地域内の町や村を次々と巡回して福音宣教する初めての巡回宣教師を任命されている。1878（明治11）年7月には秀斎とともに春近を訪ねて、秀斎から公教要理を学んでいた二人の妹に洗礼を授けている。また翌年には秀斎の父と祖父にも洗礼を授け、この地方で最初のミサを献げたことが回想録（G）に記されている。

「巡回宣教師たちは、まだキリスト教に対して邪教観が残る明治期に、さまざまな辛苦と喜びを味わいながら、日本各地を精力的に歩き、地道で粘り強い宣教活動を行いました。‥(中略)‥と同時に巡回宣教師が巡回する時、彼らは一人で歩いたり、宣教活動をしたりしていたわけではなかったことに留意したいと思います。巡回宣教師が巡回する際には、日本人伝道士が同行して宿泊や『演説会』などの手配を行ったり、日本人信徒リーダーが彼らを自分の家に泊めたり『演説会』のために人々を集めたりするなど、日本人信徒たちも宣教師と協働していたからです。」と『時の階段を下りながら』に書かれているように、秀斎も常に外国人宣教師に寄り添っていたことだろう。

1882（明治15）年、秀斎は28歳の年に侍祭の位にあがるが、戸籍調査により長男で家督を相続する人が他にいないことがわかり司祭になることを禁じられて東京を去る。

1883（明治16）年1月に春近に戻った秀斎は父と協議して岐阜県下のカトリック布教に挺身する決心を固めて、岐阜県令小崎利準氏に布教のための助言を願ったところ、二人の間に次のような対話があったことが回想録（H）に記されていたとのことである。

「秀斉がそれに対し、『自分ハ医師ノ子息ナルモ、大切ナル人命ヲ預ル学力ヲ有セズ。』と答えると、県令はなおも、『其説ハ尤モナレドモ、医師ニモ階級アリ。学士アリ博士モアルガ…君ハ幼少ヨリ父ノ膝下ニテ多クノ患者ノ実見アリ。東京ニ於テモ某医院ノ代診ヲシタル経歴アレバ、宜シク熟考シテ父ノ為尽サレタシ。』とさとしてくれた。」

小崎氏は、その後1886（明治19）年の地方官官制改正に伴い岐阜県知事になった人物である。このような助言があったにもかかわらず秀斎の決心は揺るがず、父の医業を手伝いながら布教に励んでいた様子が『時の階段を下りながら』に次のように記されている。

「一八八三年から八七年にかけて、岐阜県と名古屋区（一八七八年発足。名古屋市となるのは一八八九年）を担当していた伝道士の井上秀斉は、毎週、岐阜県の厚見郡富茂登村（現・岐阜市益屋町）、土岐郡土岐村（現・瑞浪市土岐町）、名古屋区の南呉服町（現・名古屋市中区栄三丁目）、再び岐阜県の海津郡高須町（現・海津市海津町高須町）、大垣本町（現・大垣市本町）の順に、五ヵ所の『講義所』を四日かけて回り、それぞれの場所で求道者を育てていました。こうして生まれた求道者たちの洗礼は、巡回宣教師たちが公教要理に関する試験をしたのち授けるのが常でしたが、その際、伝道士が洗礼者の代父となることもよくありました。これと並んで伝道士の重要な仕事は（一）巡回する宣教師の荷物を持って共に歩き、行く先々での宿泊の手配や、宣教師が行う『演説会』『説教』のための場所を確保すること（二）ある地域に宣教拠点を作るための家を購入する場合、自身が名義人となってその手続きを行い、パリ外国宣教会が拠点を確保するのを助けることでした。当時、日本では外国人には土地購入の権利が認められていなかったため、外国人が土地を取得するには、日本人の助けが不可欠だったのです。」

巡回宣教師や日本人伝道士の努力とともに明治政府が行った欧化主義の影響もあり、1880年代に入り信徒数は急増する。「カトリック愛知・岐阜県布教(3)」（布教25(8),1971）には、「わずか2年間で、27名から98名にまで信者を増やした秀斉の働きぶりには、全く目を見張るものがある。しかも、他の諸地方の場合と異なり、入信者の多くが地元の人びとであることも、注目に価する。年老いた父の医業を助けながらも、毎週往復40数里（160キロ余）の道のりを、秀斉自身の言葉に従えば、『郵便配達のように』東奔西走して、忙しく立ち働いたのである。当時の秀斉は、確かに燃えるような布教熱と、将来に対する明るい希望とに支えられていたいちがいない。」とある。ヴィグルー神父に続いて神奈川県から岐阜までの東海道筋の巡回を担当することになったテストヴィド神父（TESTEVUIDE, Germain Léger, 1849-1891）は、1880（明治13）年8月に秀斎とともに春近を訪れている。1882（明治15）年にはテストヴィド神父は東海道筋を巡回し、その際に司教に送った書簡が『テストヴィド神父書簡集』（2017）に「第10書簡（テストヴィド神父からオズーフ司教宛）:美濃国（1883年12月16日～21日）」として残されており、改宗に迷いがある者が秀斎に出会ったことで希望の光を与えられキリスト教徒となったこと、自分のことを「ユウビンノハイタツ（田舎の郵便配達）」と呼んでいたことなどが報告されている。

（3）分水嶺としての1890（明治23）年

神父をこの地方に定住させてほしいという秀斎ら信徒側の願いは司教にも伝えられていたようであるが、日本初のハンセン病治療で知られる神山復生病院を後に創立することになるテストヴィド神父は数多くの教会をひとりで掛け持ちして極度に忙しく、同時にこの地方を巡回していたエヴラール神父（EVRARD, Félix, 1844-1919）は他に担当していたフランス公使館付きの通訳や外交業務などの後任が見つからず、結局、開教して日の浅い秋田教会のテュルパン神父（TULPIN, Augustin Ernest, 1853-1933）が1887（明治20）年春頃にこの地方の担当者としてやってくる。秀斎らの願いはかなったわけであるが、テュルパン神父は伝道区域があまりにも広遠であるという理由で岐阜教会（秋津町の旧講義所）以外のすべての講義所を廃止して秀斎の名義で購入して設立した名古屋の主税町教会に移り住み、この新しい教会の発展に全力を注ぎ、宣教師が巡回する従来の布教法から求道者を教会に集める方法に切り替えようと考えたようである。秀斎は、すでに他の神父たちから受洗した信徒が地元岐阜に散在して生活していること、信徒たちは巡回宣教師を通じて他の町村の同志と協力しながら自由かつ自主的に地域社会の発展に尽くしてきたこと、なによりも名古屋の教会からあまりにも遠くはなれていることからテュルパン神父の方針に反対した。

『時の階段を下りながら』では1890（明治23）年をカトリック教会における分水嶺と位置付けている。すなわち、①欧化主義の影響により政府や理論的指導者たちがキリスト教に対して好意的な態度をとるようになり、近代化に苦しむ貧しい人々に手を差し伸べるこれまでの宣教姿勢から、それまで距離を置いてきた上流階級への接近を図り始めたこと、②1889年の大日本帝国憲法公布により「信教の自由」としてキリスト教が公認された一方で、キリスト教が西洋社会で果たしている機能を同等に担える存在として天皇の神格化が起こったこと、③1890年の「教育勅語」により政府が教育を通して求める人間像の倫理的・道徳的基盤が「良心」や「神」ではなく「天皇」と「天皇への献身」となったこと、④1890年に開催された長崎教会会議により第一バチカン公会議の精神が導入され、日本人信徒たちが規則と司祭の指導に忠実かつ従順な受け身の存在へと変貌し受動的な信徒集団に変化したことが

その理由として挙げられている。また1887（明治20）年頃から広小路道路の竣工や企業の創業などでこの地方も活気を帯び、1889（明治22）年7月には東海道新橋・神戸間の鉄道が全通、3か月後には名古屋に市制が施行するなど地域社会は急速に変化した。1890年を過ぎると日清・日露戦争のナショナリズムの盛り上がりとも相まって日本における布教は行き詰まりの様相を見せ、受洗者は減り、信徒たちは教会から離れていくことになる。

テュルパン神父の方針転換も第一バチカン公会議に基づく改革によるものかもしれないが、それまで主体的に活動をおこなっていた信徒たちに対して司祭が細かく指導・監督する体制が強められ、神父の方針でこれまでの活動が禁止されるといった変化は、「宣教師から与えられるものに従おうとする受動的生き方よりも、むしろ宣教師のもっているものを自分で学び取ろう、それを利用して自分の属する地域社会を発展させよう、という能動的関わり方に慣れていた」秀斎にとっては受け入れ難いことであろう。全国に散らばっていた日本人伝道士たちも同様の状況であったに違いない。

30歳を過ぎた秀斎は、1887（明治20）年岐阜県本巣郡席田村村会議員、1888（明治21）年席田村避病舎主治医、1889（明治22）年本巣郡医師会副議長など徐々に教会から離れた活動をひろげ、ついに伝道士をやめて医業に専念することになる。

（4）医師として、ひとりの信者として

この頃の秀斎は、結婚や子供の誕生など身辺に変化があり悩み事も多かったようである。回想録（G）のあるページの裏には「秀斎はズルペン霊父（ママ）の誘に由り横浜山手の女学校より妻を取り国に携帯して実の妹と同居することとなれり。妻は童貞（修道女－引用者注）の教育を受たる女にて日本の家庭の事は一切知らざる無教育の者なりしかば実父の気に入らず一家の平和を破ることに成りけり。故に止むを得ず北方町に借家をなして別居すこと（妻子だけ）となり秀斎は毎日同所へ出張して医術を開業する希望で十一月（十月の誤り－引用者注）二十七日には入用の物品を送り同夜は北口と云う妻の実父だけを宿泊せしめ翌日妻子を送ることに極たる其朝即ち二十八日の午前六時頃突然と振動が起りたるなり」と、家庭の問題を抱えながら大地震に直面した胸のうちを吐露したメモが残されている。

1891（明治24）年10月28日午前6時40分頃、濃尾地震が発生する。震源地は岐阜県本巣郡西根尾村（現・本巣市）、死者は全国で7,273名、負傷者約17,000名、全壊家屋約142,000戸。明治時代では最大規模の地震であった。秀斎は、故郷の春近で負傷者の救助にあたっていたが、被害の特に大きかった北方町から家族の様子や被害の状況が伝えられ急行する。あれほど打ち込んでいた伝道から離れ、空虚な気持ちを抱えていたであろう秀斎が未曾有の地震に遭遇し、救助活動に邁進したことは想像に難くない。とはいえ秀斎は教会や神父たちとは親交を続けており、救助活動のための看護師の派遣や物品の供出などの援助を受けていたようである。

「明治拾一年より大正初年迄に岐阜県へ伝道を試みられたる霊父は、ビグルス師を始め、テストビート師、エブラル師（ママ）……の諸師なりし。この多くの神父中、二度巡教せられたる師は、ビグルス師のみ。他の師は一回のみなりし。岐阜県の伝道の困難と、数十年間も教会が確立されざるは、天主の御恵未だ降らざるが第一なるも、教会の管轄が東京教区の遠路にありしと、毎回巡回の霊父が一定せざる為、伝道の方針が各霊父に由り異なりたる為なり。且つ甲霊父が巡回せられて幾人の知己を得られたるも、其後の霊父は異人なりし為、折角知己の霊父が来られざる為、また新たに知己を求めねばならぬ等の不便なる為なり。右の現状なれば、カトリック教会は三日教会として大に冷笑する者あるに至れり。実に残念の至りなり。前述の状態なれば、秀斉も外教人に感化せられ、漸くに奉教者の名あるのみなりし。」

これは、回想録（G）に残された秀斎の嘆きである。「漸くに奉教者の名あるのみなりし」とあるのは、「カトリック愛知・岐阜県布教（10）」（布教26(5), 1972.6）によれば「秀斉が、明治39年から昭和7年まで、ミサにあずかっても聖体拝領をせず、ことに大正期には、教会へ全然いかなかったことをさしている。これについては、別に稿をあらためて論じなければならない涙ぐましい程の事情が回想録（D）（E）（F）に述べられており、明治期に信者のほとんどいない田舎で、信者となった人の悩みの一つを浮き彫りにしているが、ここでは割愛した。」と記されており、散逸した回想録の行方が気になるばかりである。「秀斉は、宣教師と信者・求道者との人格的つながりを何よりも重視して、同一の神父が長期間定期的に信者団体を訪れてほしいのである。封建的家族的社会の中に育った当時の地方人には、宣教師と教えとを分離して、教えだけを受け取るというような芸当は、不可能に近かったであろう。」「カトリック側でも、井上秀斉氏が伝道士をしていた巡回布教期には、小規模ながら、それとは別のかなり有望な布教形態を形成していたと思う。もしテュルパン神父が各地の講義所を閉鎖してしまわず、秀斉ならびにその下にあって伝

道見習いを続けていた水田若吉氏などに、十分の布教資金やある程度の独立的権限を与えて活動させ、自分でも毎月か2ヶ月に1回地方の講義所を巡回していたならば、開発のおくれていた岐阜県の田舎町にも、キリスト教は立派に土着化し得たであろうし、神父が後年岐阜布教に多額の資金を出費して失敗を重ねることもなかったであろう。」という青山神父の言葉を、秀斎に捧げたいと思う。

(5) 人生の晩年に

秀斎は名古屋の主税町教会の設立など名古屋における布教にも深くかかわったが、故郷岐阜におけるカトリックの発展をなによりも願っていたことだろう。カトリック岐阜教会のWebページ(http://www8.plala.or.jp/gifu-catholic/history/history.htm, 参照2023.9.19)によれば、秀斎が伝道士として活発な活動をした後、1887(明治20)年にテュルパン神父が秋津町(岐阜市)に仮教会を設立、司教の巡教の折には岐阜の信者14名が堅信の秘跡を、4名が洗礼を授かったものの半年も続かず、濃尾地震後に現在の岐阜市役所西隣にある美江寺観音近くに仮教会を設けたが1年ほどで廃止されてしまった。1894(明治27)年春に柳沢町に巡回教会を設立して伝道士を住まわせたがこの教会も長続きしなかった。Webページに「井上梅さん談」とあるのは、秀斎の母と同じ名の二女の方であろう。1922(大正11)年に岐阜が神言会の担当となり、1926(昭和元)年7月にプリカ神父(PRYKA, Bruno SVD, 1897-1946)が岐阜市徹明町近くの宿屋を借り、直に長住町の借家を仮教会にして岐阜市における本格的な布教がようやく始まった。1929(昭和4)年8月、青柳町にドイツ人マックス・ヒンデル氏設計のバジリカ式の新聖堂が建てられ、75歳になっていた秀斎もその美しい聖堂で祈りを捧げることができたのである。回想録(G)の後半には、「是に昭和の始め、…今回、ライネルス師名古屋教会所となり、岐阜市に教会を設立せられ、毎日曜日ミサ聖祭を拝聴することとなりしは実に嬉しき次第なり。」とある。

秀斎の人生は、明治の開国以降の日本におけるカトリック宣教の歴史そのものである。日本の開国とともに成長し、パリ外国宣教会による日本宣教時に信仰に目覚め司祭を志すが、家督を継ぐ立場であることからその道を閉ざされ、日本人伝道士となり名古屋や岐阜でのカトリック布教に邁進するも、カトリック教会の方針転換のため志半ばに教会を離れざるを得なかった。人生の晩年には医業の他に、茶道や俳句を嗜む姿も浮かびあがってくるが、その心中はどのようなものであっただろうか。

2. 名古屋教区布教史における井上秀斎関係資料の位置づけ

(1) 資料群として

前章でも述べたように、栗木氏より寄贈された資料一式を「井上秀斎関係資料」として整理・保存している。もちろん秀斎と直接・間接に関連するものがこの資料群の主体ではあるものの、詳細をお伝えすれば、秀斎には当たらずとも遠からずのごときものを含む雑多諸々の集合体、というのが実態である。これらの中に軸を見出すとすれば、やはり名古屋教区におけるカトリックの布教の歴史であろう。そのため、実態に即していえば「秀斎関係を主とした名古屋教区布教史に係る史資料」という方が適切かもしれない。いくぶん大袈裟な章題を掲げたことを気にしつつも、これらの資料群を紹介するのに他に表現の仕様がないと考えるのも正直なところである。それゆえ、逆説的ではあるが、名古屋教区のカトリック布教史において当該資料群がどのような意味をもつのか、どのような利用価値がありそうか、そのあたりを少しばかり記してみたい。

話は飛ぶが、カトリック文庫では、個々の教会の歴史(教会史)やカトリックの各修道会の歴史(修道会史)をまとめた資料の収集にも力を入れている。当『カトリコス』の記事執筆において、とりわけカトリックの布教史を調べる際には過去に幾度となく助けられた。しかし、こうした資料は関係者にのみ配付される非売品であることが多いためか、あるいは手弁当により簡易につくられることも少なくなく散逸しやすいためか、はたまた安価により古書市場に出回りにくいためか、あまり流通していない。では、幸いにも公刊・非公刊にかかわらず世に出された教会史・修道会史資料は、何に基づき執筆されたのであろうか。もちろん古い信者等関係者の記憶もさることながら、それだけでは心許ない。つまり、秀斎関係資料のような史資料が必要となるはずであり、教会史・修道会史にとって紛れもなく回想録は一次資料となる。実際、当該資料群には何人かの神父の名前や主税町などの具体的な教会、パリ外国宣教会や神言修道会などの修道会につながる記述もある。また、広く名古屋教区の布教史について書かれた前掲の青山論文(布教25(4,5,8,9,10,11)-26(2,3,4,5), 1971.5,6,9,10,11,12-1972.3,4,5,6)なども、事実関係は当該資料群

（の回想録）に負うところが大きいと見られる。そうであるからこそ、前述のとおり10種中8種の資料の行方が知れないのは悔やまれる。特に、「布教26(5)」の注113には（前章でも紹介した）「秀斉が、明治39年から昭和7年まで、ミサにあずかっても聖体拝領をせず、ことに大正期には、教会へ全然行かなかった…。これについては、別に稿をあらためて論じなければならない涙ぐましい程の事情が、回想録（D）（E）（F）に述べられており、明治期に信者のほとんどいない田舎で、信者となった人の悩みの一つを浮き彫りにしているが、ここでは割愛した」とあり、通史では語り尽くせない詳細な事情を直に読む機会が失われている現状は残念としか言い様がない。とはいえ、それ以外では「それぞれ部分的に重複」とも述べられており、本学所蔵の（G）および（J）と重複しないのは、青山論文の注を総合すれば（B）（C）（H）の一部に限定されるようである。この点からしても、当該資料群がもつ資料的価値は、名古屋教区におけるカトリックの布教の歴史を語るうえで、必要不可欠なものと言っても差し支えないであろう。

次項では、このような性質をもつ当該資料群ひとつひとつについて、やや詳細に紹介していくこととする。

（2）個々の資料について

No.1：岐阜縣天主教傳道日記

青山神父が論文（「カトリック愛知・岐阜県布教」（布教）25(4), 1971.5）の中で符号（G）を付与しているのが本資料である。秀斎の直筆。形態としては、縦20マス×横10マスの原稿用紙（片面印刷）50枚が、ほんの少し厚みのある表紙（縦19cm×横13.5cm）に糸で3か所が綴じられている。3か所のうち上下の2か所の糸は新しいことから、後年綴じ直されたのかもしれない。表紙には真ん中からやや左に“創作箋”と印刷されており、上方やや右には方形枠に植物と鳥が飛ぶ姿、その右側には縦に片側波線1本の意匠が施されている。その方形枠の右下には、何の意味であろうか“天”の文字が記載されている。左端には、“岐阜縣天主教傳道日記”“井上秀斎”と2行にわたって手書きされている。これも秀斎の直筆であろうか。また、“名古屋市昭和区八雲町七〇番地”“神言神学院内”“青山玄”と縦書き3行のゴム印らしきものが下方やや右に押されている。これら以外では、左上に前述の“G”と赤ペンで記入されているのが目を引く。そのさらに左上には、同じく赤ペンで“G”と記入し丸で囲んだあと、上から黒のボールペンで“A”と訂正しているようにも見える状態となっている。順序としては恐らく、“G”を丸囲みしたあと“A”と訂正し、さらにそのあとその右斜め下に“G”と再訂正したように見受けられる。いずれも青山神父の手によるものだろうか。表紙を繰った遊び紙には、表紙と同じ縦書き3行の青山神父のゴム印が押され、その左やや下に“栗木蔵書”と朱印が押されており、所有者の変遷が見て取れる。このページを繰ると本文1ページ目となり、第1行目には“岐阜縣下ニ於イテ天主教傳道ノ略記”とあって、表紙左端とは若干異なる表記となっている。本文は1マスに1文字ずつ丁寧に記載されているが、ところどころに文字の挿入、訂正の跡が見られる。また、紙が貴重な時代だったのであろう、裏面にまで書き込みが及んでいるページもいくつか見られる。ただ、裏面の記載の中には、書き殴ったような文字の上から大きく“×”が付された箇所もあって、どこまでがイキなのか、この中に重要な記述はないのか、精読が必要なのかもしれない。内容の把握は、青山論文と次に紹介するNo.2を読んでいただくことに譲りたい。

No.2：岐阜県下に於いて天主教伝道略記

本書は上記No.1を寄贈者の栗木氏が活字に起こしたものである。読み易くするため、原文はカタカナであった送り仮名をひらがなに改めたり、目次を付与したり、関連する写真を掲載するなど工夫が見られる労作となっている。No.1の裏面記載分も正確に活字に起こしてあり、内容を理解するためには大変便利である。なお、栗木氏の了解が得られれば、のちにカトリック文庫のWebページに掲載する予定である。

No.3-1：Status missionis praefecturae apostolicae de Nagoya : a die 1. Julii 1955-30. Junii 1956

1955年7月1日から1956年6月30日までの名古屋教区における布教状況を示す各種統計である。この資料が入れられた封筒には赤字で“明治―1950までの名古屋教区史 関係史料 P.Antoniより”（下線ママ）とあり、フィリップ・アントニー神父より青山神父が譲り受けたもののひとつかと思われる。表面には、当時の名古屋・新潟知牧区の教区長であった松岡孫四郎神父の名がローマ字表記で見られる。なぜこの年の統計のみが残されていたのかは不明。

No.3-2：Materialsammlung zu einer Chronik der Apostolischen Präfektur von Nagoya

No.3-1と同じくフィリップ・アントニー神父より青山神父が譲り受けたもののひとつかと思われる。No.3-1とともに入れられていた封筒には、鉛筆で“井上秀斉回想録J（ローマ字・ドイツ語訳）”と記載があり、（再度の紹介になるが）前掲の青山論文の記述「神言会東京修道院長フィリップ・アントニー神父が、大正13年2月8日付の井上秀斉

氏回想録をローマ字で書き写し、さらにドイツ語に訳したもので、ローマ字文とドイツ語訳は残っているが、元の手記（回想録（J））は失われている」ことと符合する。ローマ字部分は我々でもおおよその読解が可能であり、漢字かな交じりへの翻字を進めている。作業の完了・確認ができ次第、本資料もカトリック文庫のWebページに掲載する予定。

No.4-1：名古屋教区考 草稿一束（松風誠人案）

資料が入れられた封筒には赤字で“名古屋教区考 草稿一束（松風誠人案）”と記載されており、元本学職員・松風誠人氏による（文字通り）何かしら刊行予定の草稿かと思われる（最終的な刊行物は現時点で不明）。松風氏は本学（園）に係る数々の記録（通称:松風メモ）で知られ、学園の歴史を調べる際の拠り所である『南山学園の歩み』（南山学園，1964）の修正作業にも尽力されている（参考:「座談会『カトリック文庫20年の歩み』」（カトリコス）No.28，2013.11）。内容物としては、名古屋教区年表（10枚）、主税町教会考:創設當所（22枚）、主税町教会考:ルルド洞窟（4枚）、カトリック・ボーイスカウト（1枚）。

特殊な紙質か。印刷されたと思しき罫線が一部に残っており、元は横書きの便箋などを用いたようにも見える。それを横向きにして縦書きに使われたか。さらに年表として使い易いように定規で罫線を加え、印刷および手書きの罫線に沿って書かれている様子。その原稿を旧式コピー機で複写したものであろうか、文字がところどころ消えかかっており、状態は良くない。

No.4-2：名古屋教区考 草稿一束（松風誠人案）

No.4-1と同じ封筒に入れられた資料である。内容物としては、昭和十九年(一九四四年)日本天主公教祝日表東京大司教区用、『カトリック新聞』（972号）および『名古屋カトリック教区報』（第1-3号，第5号，第19-20号）からの秀斎関係抜粋記事（計18枚）。

No.4-1と同様の紙質か。左下に横向きに“Nanzan Gakuen”の印字が見られる。また、細かいマス目がうっすらと残っていることから、南山学園の横書き原稿用紙を縦書きに用い、マス目を無視して手書きしたようにも見受けられる。それをNo.4-1と同様に旧式コピー機で複写したものであろうか、やはり文字が消えかかっており、状態は良いとは言えない。

No.5：カトリック名古屋教区史跡案内資料

殉教者顕彰委員会のメンバーとして栗木氏が史跡案内のために作成された資料（7p）。秀斎の経歴から布教活動、その後の人生をたどるなど、要領よくまとめられている。

No.8：名古屋・金澤方面

明治期半ばの、豊橋・岡崎・名古屋・岐阜・金澤方面での布教活動について、いくつかの文献からの引用に基づいて書かれた原稿か（4枚）。筆者や執筆目的などは不明。

No.9：主税町付近地図

手書き地図、“明治二年のもの”との記載あり（尾府全図--名古市史別館地図）（1枚）。青山神父により『名古 [屋] 市史』から便箋に書き写されたものだろうか。

No.12：豫告

手書きメモ（井上秀斎医院の種痘済証明書様式の裏に記載）（1枚）。“カトリック青年會”“御協議申上ゲタイ事アリマス”“[神言会員 ブルーノ・]プリカ師”などの文字が見られる。依頼に向けての下書きだろうか。時代が時代とはいえ、裏紙を使用しているところにも秀斎の質素で丁寧な暮らしぶりがうかがえるのではないか。

＊記載のない番号の資料については、個人情報が含まれるなど慎重な取り扱いが望まれるため、この場での紹介は控えさせていただく。

(3) 資料（群）のもつ展開の可能性について

当該「井上秀斎関係資料」は、考え方次第では（言い方は悪いが）青山神父等によって汲み取れるものは汲み尽くされた史資料であり、必要なことは書き尽くされているのかもしれない。本稿も青山神父執筆の文献なしには成立しなかった。しかし、成果物の根拠の確認は時として求められるものであり、いつでも求めに応じられる状態にしておくべきものであろう。所蔵館の責務でもある。

他方、「伝道士は一般信徒だが、宣教師や日本人司祭と密接に協働し、聖職者と一般信徒の間に位置する中間的存在と言える。これまで、伝道士については、各地のカトリック教会記念誌を中心に断片的に取り上げられ、明治以後の日本カトリック教会史における彼らの働きの重要性が指摘されているものの、管見の限りでは伝道士に関

する専論はない。」（三好千春「カトリック伝道士・細渕重教とその時代」（南山神学）41, p.113-114, 2018.3）との指摘もある。確かに、青山論文でも、名古屋教区における宣教活動をまとめるうえで秀斎の回想録などを利用されてはいるものの、目的はあくまでも布教史の記述にあった。しかしながら、各伝道士の基礎研究が個別に存在し、各伝道士と宣教師や一般信徒との関係性を踏まえて通史を書く、というのが自然とも考えられる。その基礎研究、特に秀斎の人生と生きた時代を調査研究するためには、当該「井上秀斎関係資料」は紛れもなく一級の原資料と言えるだろう。

また、前項で触れた資料No.1の裏面の記述（「書き殴ったような文字の上から大きく"×"が付された」と紹介した部分）に、重要な事実の見落としがあるかもしれない。あるいは、秀斎の複数の直筆史資料を読み比べれば、思考・志向の変化に気づかされる可能性さえある。史資料の価値を買い被りすぎたり、意味をこじつけることは戒めなければならないが、同時に、可能性を限定して宝の持ち腐れとならないようにも留意したいところである。

3. 寄贈資料の紹介

凡例：井上秀斎関連資料No.〇
①タイトル / 著者、②製作地：製作者、③製作年、④ページ数；大きさ（形態）、⑤その他

井上秀斎関連資料No.1

① 岐阜縣天主教傳道日記 / 井上秀斎 [著]
② [岐阜?] : [井上秀斎?]
③ 不明
④ 50枚 ; 19cm
⑤ タイトルは表紙による。冊子体。井上秀斎の名古屋・岐阜での布教活動中に見聞きしたことを記した直筆の日記。

井上秀斎関連資料No.2

① 岐阜県下に於いて天主教伝道略記 / 井上秀斎著；栗木英次目次・画像・現代語訳
② [名古屋?] : カトリック名古屋教区殉教者顕彰委員会委員　栗木英次
③ 不明
④ 13p ; 26cm
⑤ タイトルは表紙による。冊子体。資料No.1『岐阜縣天主教傳道日記』をもとに栗木英次氏が目次等を加筆、画像を挿入し、読みやすく編集したもの。

井上秀斎関連資料No.3-1

① Status missionis praefecturae apostolicae de Nagoya : a die 1. Julii 1955-30. Junii 1956 / Ordinarius, Petrus Magoshiro Matsuoka ; Vicarius delegatus, D. Franciscus C. Babulik
② Nagoya : [Praefectura Apostolica de Nagoya]
③ 195-?

④　図版1枚 ; 27×39cm
⑤　1955年7月1日-1956年6月30日のカトリック名古屋教区における宣教状況の統計。
封筒表面の記載内容: 明治-1950までの名古屋教区史関係史料　P. Antoniより

井上秀斎関連資料No.3-2

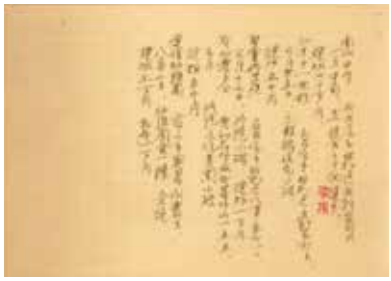
①　Materialsammlung zu einer Chronik der Apostolischen Präfektur von Nagoya / Zusammengestellt von Philipp Antoni
②　不明 : Philipp Antoni
③　19--?
④　24枚 ; 29×22cm
⑤　フィリップ・アントニー神父が、統計や各種記事をもとにまとめた名古屋教区史。この中に井上秀斎回想録(J)も含まれる。
封筒表面の記載内容: 明治-1950までの名古屋教区史関係史料 P. Antoniより, 井上秀斉回想録J(ローマ字・ドイツ語訳), 大正14年4月1日 外国人 土地所有許さる, 昭和17年3月28日 (明治以降の)外国人の永代借地権 整理される

井上秀斎関連資料No.4-1

①　名古屋教区考 草稿一束(松風誠人案) [その1] / [松風誠人]
②　[名古屋] : [松風誠人]
③　19--?
④　37枚 ; 18×26cm
⑤　内容: 名古屋教区の管轄 ; 名古屋教区聖堂区設置年表 ; 主税町教会考 : 創設當所 ; 主税町教会考 : ルルド洞窟 ; カトリック・ボーイスカウト
封筒表面の記載内容 : 名古屋教区考 草稿一束(松風誠人案), 附属: 主税町教会の登記簿, 日本カトリック新聞にある井上秀斎氏関係記事, 主税町教会主任助任司祭

井上秀斎関連資料No.4-2

①　名古屋教区考 草稿一束(松風誠人案) [その2] / [松風誠人]
②　[名古屋] : [松風誠人]
③　19--?
④　19枚 ; 18×26cm
⑤　内容: 昭和十九年(一九四四年)日本天主公教祝日表　東京大司教区用 ; 『カトリック新聞』(972号)および『名古屋カトリック教区報』(第1-3号, 第5号, 第 19-20号)からの抜粋記事。
封筒表面の記載内容: 名古屋教区考 草稿一束(松風誠人案), 附属: 主税町教会の登記簿, 日本カトリック新聞にある井上秀斎氏関係記事, 主税町教会主任助任司祭



井上秀斎関連資料No.5

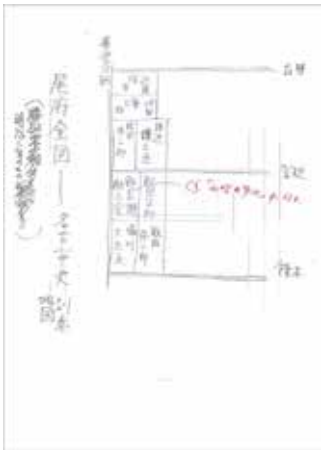
① カトリック名古屋教区史跡案内資料 / 殉教者顕彰委員会 資料作成栗木英次
② 不明 : [栗木英次]
③ 不明
④ 7枚 ; 30cm
⑤ タイトルは巻頭による。井上秀斎の履歴や伝道活動、伝道士を辞した後の足跡がまとめられたもの。

井上秀斎関連資料No.8

① 名古屋･金澤方面
② 不明 : 不明
③ 不明
④ 4枚 ; 22cm
⑤ 明治期の豊橋･岡崎･名古屋･岐阜･金澤方面での布教活動の変遷をまとめたもの。原稿用紙4枚。

井上秀斎関連資料No.9

① [主税町付近地図]
② 不明 : 不明
③ 不明
④ 1枚 ; 23×18cm
⑤ 手書きメモ。“尾府全図 名古 [屋] 市史 別巻地図(明治二年のもの)”と記載あり。



井上秀斎関連資料No.12

① 豫告
② [岐阜] : [井上秀斎]
③ 19--?(明治40年代か)
④ 1枚 ; 14×19cm
⑤ 井上秀斎直筆のメモ書き。カトリック青年会宛ての原稿と思われる。

おわりに

どの世界にも、どの分野にも、どの時代にも、その人物がいなければ現在の好ましい状況は想像できない、というほどのひとかどの人物がいる。その人物が先鞭を付けた、あるいは新しい地平を見せてくれた、あるいはその人物の存在の前後で時代が画された、という人物である。名古屋教区におけるカトリックの布教についていえば、それが秀斎なのであろう。そのような人物に関する一次史資料、市販されていない唯一無二の原本が寄贈され、研究のため利用に供すことができることを素直に喜びたい。

ひるがえって、カトリック文庫だけでなく図書館ではこのような一次資料をほとんど所蔵していない。完成された既刊の資料が大半であり、アーカイブズとは違って、図書や論文といった成果物を書く過程で利用する資料の扱いはどちらかといえば不得手である。そのことは致し方ないとも考えられる一方で、「井上秀斎関係資料」のように資料群として図書館でまとめて保存・管理することが適切と思われる史資料があれば、柔軟に対応していきたい。ただし、このような史資料は、公開には憚られる要素が含まれることも容易に想定されるため、そのあたりは慎重にも慎重を期すこととしたい。

いずれにせよ、研究に資する史資料の受入・所蔵と、それをどこまで/どのように利用に供するかということは、絶えずバランス感覚が問われるものと認識している。図らずも今年度でカトリック文庫設立30周年となる。この記念の機会に、貴重な史資料のこれまでの寄贈にはあらためて感謝しつつ、その適切な保管と提供について引き続き心掛けたい。

【参考・引用文献】

●資料
・陰山宋編『ツルペン神父の生涯とその思い出』(中央出版社 , 1963)
・五味巖等編『素顔の名古屋教区』(松岡司教の司祭叙階五十年「記念事業会」, 1968)
・カトリック名古屋教区殉教者顕彰委員会[編]『あかしする信仰:東海・北陸のキリシタン史跡巡礼 : カトリック名古屋教区殉教者顕彰委員会』(カトリック名古屋教区宣教司牧評議会, 2012)
・神言修道会来日百周年記念誌編集委員会編『神言修道会来日百周年記念誌 (一九〇七年-二〇〇七年)』(神言修道会日本管区長, 2015)
・中島昭子著『テストヴィド神父書簡集 : 明治の東海道を歩いた宣教師』(ドンボスコ社, 2017)
・三好千春著『時の階段を下りながら : 近現代日本カトリック教会史序説』(オリエンス宗教研究所, 2021)
●論文・記事
・「ツルペン師の訃報を聞き往時を偲ぶ」井上秀斎(日本カトリック新聞)426, 1933.12.10
・「続・丹羽玄塘が事」森徳一郎(郷土文化)9(3), p.24-26, 1954.5
・「カトリック愛知・岐阜県布教[(1)]-(10)」青山玄(布教)25(4), p.209-213, 1971.5; 25(5), p.273-277, 1971.6; 25(8), p.453-457, 1971.9; 25(9), p.519-524, 1971.10; 25(10), p.593-597, 1971.11; 25(11), p.657-662, 1971.12; 26(2), p.117-122, 1972.3; 26(3), p.183-188, 1972.4; 26(4), p.241-246, 1972.5; 26(5), p.314-319, 1972.6
・「キリシタン時代と明治前期における美濃尾張伝道の性格」青山玄(名古屋キリシタン文化研究会会報)32, p.257-258, 1986.7
・「明治・大正・昭和初期カトリック信徒の宣教活動」青山玄(南山神学)10, p.177-196, 1987.2
・「『巡回宣教師』テストヴィド神父の宣教活動」三好千春(日本カトリック神学会誌)25, p.111-134, 2014
・「カトリック伝道士・細渕重教とその時代」三好千春(南山神学)41, p.113-144, 2018.3

(石田 昌久、加藤 富美、伊藤 禄美、伴 祐美子、渡部 陽香)

「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、聖書、祈祷書、聖歌集、要理書およびそれらの解説書、布教資料、聖人伝などを、多くの皆さまからご寄贈いただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。また、従来からの資料に加えまして、お手元に教会・修道会史資料(教会・修道会刊行物)などがございましたら、引き続きご寄贈を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

カトリコス　No.38　　2023.11.1発行
南山大学ライネルス中央図書館カトリック文庫通信
編集・発行：カトリック文庫グループ
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
E-mail : lib-catho@nanzan-u.ac.jp
Phone : 052(832)3163
＊図書館Webページでもご覧いただけます。
https://office.nanzan-u.ac.jp/library/